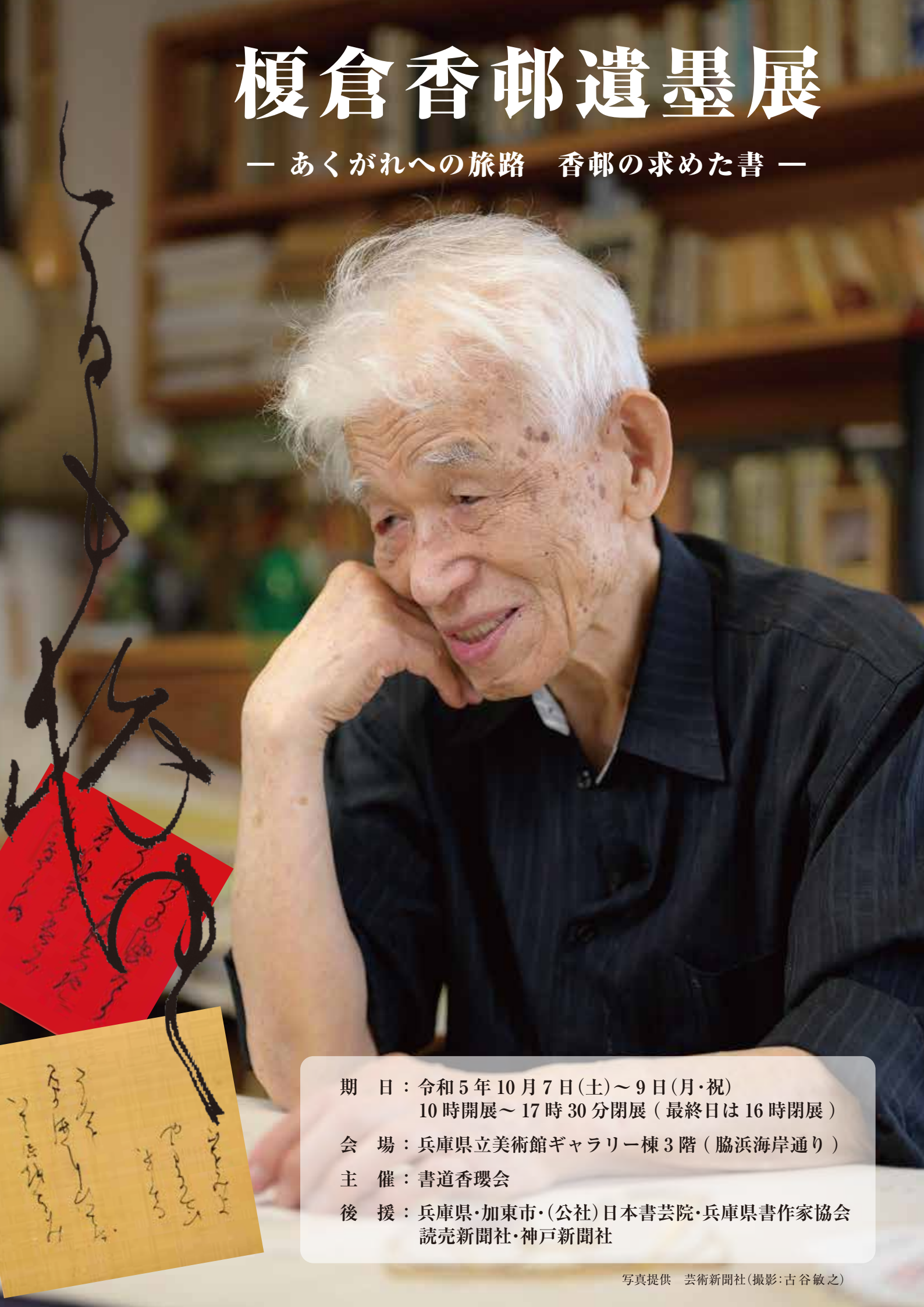
榎倉香邨遺墨展

― あくがれへの旅路　香邨の求めた書 ―



期　日：令和５年 10 月７日(土)～９日(月･祝)
10 時開展～ 17 時 30 分閉展（最終日は 16 時閉展）

会　場：兵庫県立美術館ギャラリー棟３階（脇浜海岸通り）

主　催：書道香瓔会

後　援：兵庫県･加東市･(公社)日本書芸院･兵庫県書作家協会
読売新聞社･神戸新聞社

写真提供　芸術新聞社(撮影:古谷敏之)

過去の仮名発展史の中に、
たれしも意表だにしなかった
凛乎たる世界の現出

古筆学の祖・小松茂美よりそう評された書家がいました。その書家こそ榎倉香邨です（1923～2022）。

「本阿弥切」から始まり、「一条摂政集」「香紙切」といった繊麗にして雄勁な仮名古筆の世界を、高度な空間意識の下に見事に現代へと再現し、若山牧水の歌と自らの書を密接不離のものとし、その想いを追求することで書き上げた作品まで、その生涯で残した作品の数々は、現代書道に比類なき世界を描き続けました。

本展は、生誕100年に合わせ、各地の博物館施設や個人等に収蔵される遺墨の中から、榎倉香邨が現出させた世界の数々の全貌を「静」「動」「焔」のそれぞれを象徴するテーマの３部に構成して展観いたします。また、西谷卯木、青山杉雨、若山牧水といったキーパーソンから、榎倉の追い求めた「あくがれ」の世界を紐解きたいと思います。多くの皆様にご高覧賜りたく、ご案内申し上げます。

あくがれ　　2017 年
（帝京大学書道研究所蔵）

第一部　「静」　香邨の書の模索と形成

日展初入選（1957 年）から日本芸術院賞受賞（1995 年）まで、榎倉香邨の書が形成され、徐々に「静」の世界へと向かうプロセスを辿ります。

第二部　「動」　「雅」とは何か、との問い「雅」ではないもの

日本芸術院賞受賞以後、仮名は「雅」でなければならないのかという問いを抱きながら、書風の一大転期である個展「魅惑の白」の境地、いわば「動」の世界へと到るプロセスを追います。

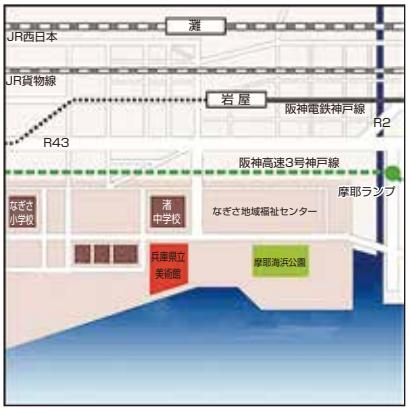
第三部　「焔」　香邨の書

若山牧水への深い傾倒が、榎倉香邨の書への情熱を爆発させる契機となります。牧水への「あくがれ」が生み出す、「焔」の如き“神工鬼手”の世界に迫ります。

炎　2015 年　　（帝京大学書道研究所蔵）

会場案内　**兵庫県立美術館ギャラリー棟 3F**

〒651-0073 兵庫県神戸市中央区脇浜海岸通 1-1-1
JR 灘駅から南へ徒歩 12 分　阪神岩屋駅から徒歩 9 分

問い合わせ先　**書 道 香 瓔 会**

〒679-0212 兵庫県加東市下滝野 4-107・Ｉ-105
TEl. ０７９５－４８－５４９５（土･日･祝日は休みです）